

## II 小児科漢方処方にあたって知っておきたいこと

### 1. はじめに

さて、Iでは漢方にまつわる歴史について概観しましたので、続いて、小児に漢方薬を処方するにあたって押さえておきたい漢方薬治療に関する知識を、具体的にご紹介して参ります。最初に、漢方薬の特徴、その西洋薬との違いについてお話しをします。次に、漢方薬がどのように生体に作用するのかについて、その大枠を述べます。随時、小児科特有の観点を織り交ぜながらお話しを進めていきます。

### 2. 漢方治療の特徴

#### ●●● 漢方薬は生薬の組合せ

漢方薬の最大の特徴は、複数の「生薬」が組み合わされて「方剤」となっていることです。たとえば、皆さんおなじみの葛根湯かっこんとうという方剤は、葛根かっこん・麻黄まおう・桂皮けいひ・芍薬しゃくやく・生姜しょうきょう・大棗たいそう・甘草かんそうの7つの生薬から作られています。そしてこれらはすべて、自然界から採取されたものを原料としています。

葛根はクズの根、麻黄はフタマタマオウという植物の茎、桂皮はケイ（シナモン）の皮を原料とします。大棗はナツメ

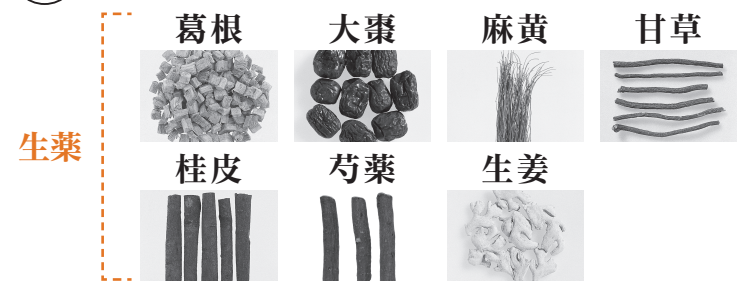
などの果実から作ります。これらはみな植物ですが、生薬となるのはそればかりではありません。阿膠あきょうは口バの皮を水に漬けた液を煮詰めたものですし、石膏せつこうなどの鉱物も生薬として用いられます。ちなみに日本薬局方において、生薬とは「動植物の薬用とする部分、細胞内容物、分泌物、抽出物又は鉱物など」と定義されています。

多くの西洋薬は人工的に合成された単一成分の薬剤であるのに対し、漢方薬は自然界に存在するものを加工し、これを複雑に組み合わせたものであること。この点が両者の大きな違いです。

そして、現在わが国でエキス剤として用いることのできる方剤は、その基本的な構成が既に古代の中国において完成されていたものがほとんどです。上記の葛根湯も、1800年ほど前に成立したとされる古典、張仲景ちやうちゆうけいの『傷寒論』にすでに記載されています。残念ながら、それらの生薬の組合せがどのようにして考案されたのかについては、これを記した文書も発見されていませんので、もはや今となっては知ることができません。無数に考え得る生薬の組み合わせの中から薬効のあらたかな方剤を見出す作業は、想像するだけでも気が遠くなるような思いがします。漢方薬は、まさに中国3千年の歴史に裏づけられた「二度と構築できない人類の知的財産」<sup>1)</sup>と言えるでしょう。

## No.4 感冒 インフルエンザ

### 1 葛根湯 [かつこんとう]



### 27 麻黄湯 [まおうとう]



#### 処方例



- インフルエンザなどの急性熱性疾患の初期
  - 比較的元気がある
  - 水分がとれる
  - 汗がまだ出ていない
- そのような場合に短期間処方すると有効です

**POINT**

- ・あくまでも初期段階に
- ・気持ちが悪くて水分がとれない患者さんには使ってはいけません
- ・抗ウイルス剤との併用も可能です
- ・葛根湯は首や肩がこるタイプの風邪に処方します。風邪に伴う頭痛の多くは首や肩の筋緊張に由来します

### 感冒は、もっとも common な疾患ですが……

小児科の日常診療でもっとも頻繁に遭遇するのが感冒であることは、誰しもが実感していることでしょう。著者のクリニックにも、春夏秋冬、頻度の差こそあれ、「風邪をひいてしまったようなんです」とマスクをしたお子さんを連れて(あるいはご自身もマスクをされて)来院する親御さんが後を絶ちません。

言うまでもなく、感冒はウイルス性の非特異的上気道感染症です。当然、抗菌薬は効きませんから、その処方は無益です<sup>1)</sup>(念のために抗菌薬を使っておくという処方はありません)。鼻水、咳、発熱に対しての対症療法は可能ですが、治癒は子どもの自然治癒力に頼っています。たしかに、感冒は自然治癒することが多い疾患です。しかし、それでは、有効な治療を求めてわざわざ来院した患者さんにとっては失望だけが残ることになってしまいます。現に米国では、診療所では感冒に対応しないとわかっている多くの患児(の親)たちが市販薬(OTC薬)を求めた結果、これによる不整脈、意識障害などの重篤な副反応が問題となりました。現在では2歳未満児へのOTC薬投与は禁止されています<sup>2)</sup>。

### 感冒には『麻黄剤』

このように、西洋医学の世界では、十分な治療が施されて